

# 地理・歴史教育における地域教材の意義

## The Significance of Teaching Materials Based on Locality in Geography and History Education

高柳 昌久 TAKAYANAGI, Masahisa

- 国際基督教大学高等学校  
国際基督教大学教育研究所  
International Christian University High School  
Institute for Educational Research and Service, International Christian University



**Keywords** 地理歴史教育法, 地域教材, 中島飛行機三鷹研究所

teaching methods in geography and history, teaching materials based on locality, Nakajima airplane corporation Mitaka laboratory

### ABSTRACT

高校の地理歴史教育において、地域教材はあまり扱われない。受験教育に追われ授業時間が不足しており、なおかつ高校は小中学校に比べ地域性に乏しいからである。しかし筆者は情報化の進展のなかで、地域教材は高校生にとって独特な意義を持つと考える。その意義は次の4点である。1. 通常の授業で教える知識の重要性を生徒に実感させることができる。2. 教員・生徒が検証可能なリアリティーを持つ。3. 実証的な調査の方法を生徒に教えることができる。4. 学校の情報源としての価値を高めることができる。これらの意義を、筆者がICU高校において作成した、ICUキャンパスの前身である中島飛行機三鷹研究所を教材として用いた歴史・地理の授業を通して示す。

Teaching materials based on locality have not been widely used in geography and history education at high school level. This is because there is a shortage of class hours because preparation of students for university entrance exams is prioritized and high schools, in comparison to junior high schools and elementary schools, are less related to the locality. However, the author believes that the more the information society advances, the more teaching materials based on locality will carry a unique significance for high school students. To be more specific – 1. They will enable the students to realize the significance of the knowledge taught in conventional lessons. 2. The instructors, as well as the students, will feel the reality of the materials because they are directly verifiable. 3. The instructors will be able to teach the methods of research through verifying evidence and witnesses. 4. They will deepen the value of school as a source of information. Taking these points into consideration, the author will demonstrate the significance of teaching materials based on locality through presentation of geography and history lessons

specifically dealing with Nakajima airplane corporation Mitaka laboratory, which was a military facility that was situated where the ICU campus lies today. These lessons were made by the author at ICU High School, which shares the ICU campus with the university.

## 1. はじめに

地理教育において生徒に身近な地域調査が重要であることは言うまでもない。しかし高校段階では受験教育に追われ、そこまで授業で扱うことは難しいのが実情である。また歴史教育においては小学校段階では地域教材が重視されるが、学年が上がるにつれて重視されなくなり、高校段階では地理教育にもまして地域教材が扱われることは少なくなる。この傾向に対し、筆者は高校の地歴科教育においても地域教材をさらに活用することが、情報化社会への対応として重要であると考える。

本稿では、高校地歴科における地域教材の意義とそれに適した授業方法を、筆者の勤務校・ICU高校における日本史Aの授業実践・地理Aの授業プランを用いて説明する。

ICU高校は生徒数の3分の2を、海外在留歴をもつ帰国生が占める。通学時間が1時間半以上の遠距離通学者も多い。公立の小中学校のような地域との結びつきはない。しかし毎年2月にはICUキャンパス・都立野川公園をコースとして用いるロードレースがおこなわれ、その練習として生徒は体育の授業でICUキャンパス内を何回も走ることになる。キャンパス内の主要部分の景観は彼らも目にしている。

本稿で取り上げる教材は、ICUキャンパスの前身と言える中島飛行機三鷹研究所のあった地域である。この研究所は太平洋戦争中に建設され、アメリカと戦争をするための軍用機開発を試みた。筆者は2002年からこの研究所についての調査をおこなってきた<sup>1</sup>。

いうまでもなく、これから紹介する授業実践・プランはICU高校がそのような歴史を持つ地に建設されたから可能なものである。しかしこの具体例を通して示す地域教材の特質と授業方法

は、他の学校でもその近隣の地域教材を使えば十分に実現可能なものである。そもそも地域教材の意義、特に魅力は特殊と見える具体例を通してしか示せないのではないだろうか。

## 2. 地域教材の従来の意義づけ

戦後の地域史の掘りおこし運動とそれに基づいた歴史教育の従来の意義づけをみてみよう。

1960年代後半から民間教育団体である歴史教育者協議会の一部で提起された地域史の掘りおこし運動は、国民的課題と地域の課題との間には「発展段階」「運動法則」という言葉で示される強い関連性があることが前提とされていた。1970年ごろ盛んにいわれた「安保も帝国主義も地域にゴロゴロしている」という言葉がその象徴である。そして国民的課題と地域の課題を解決していく主体を、地域の住民・教員が自らおこなう歴史の究明・学習の中で養うことが目的とされた。学校の中での地域教材を扱った社会科の授業も、そのなかに組み込まれて考えられていた。

これに対し70年代の末から文部省や各地の教育委員会も、社会科における地域の学習を強調するようになった。そのねらいは、「郷土愛と社会連帯意識の啓培を図りながら、ふるさとの自然や風土を愛し、歴史・伝統・文化を正しく受け継ぐ人間、ふるさとの発展に尽くす実践的な人間を育成する」ことであった<sup>2</sup>。

歴史教育者協議会も文部省・教育委員会も共通して、その地域で教育を受けた生徒の多くが将来もそこに留まることを前提としているように思われる。そして地域を含む社会を支えるための主体の形成を方向性が異なるとはいえ、強く意識している。

しかし他の多くの大都市の私立高校は似たよ

うな状況にあると思われるが、ICU 高校には遠距離通学者が多く、生徒が卒業後、どこで生活するようになるのかはわからない。直接海外の大学に進学する生徒すらいる。従来の意義づけで地域を強調してもあまり意味がないことになりそう。地域を支える主体形成という課題も、地域というより生徒の将来の行動範囲にみあった社会を支えるものとして、模索していく必要が出てくる。

筆者の地域教材に対する関心は、社会を支える主体の形成という問題を後回しにして、そのような問題に取り組む前提にもなるが、とりあえず現在目の前にいる生徒をどのように授業に集中させ授業を成立させるかということにある。これは現場の教員が日々直面しなければならない課題であるが、情報化の進展とともに難しい課題となっていると考える。

一般に初めて授業を担当することになった地歴科の教員が生徒を集中させるためにまず工夫することは、単に教科書の内容をそのままレクチャーするのではなく、内容に具体性をもたせることだろう。そのために参考書を読んでエピソードを集めたり、写真や学習マンガ・イラスト入りのプリントを作成したり、パネル・ビデオやDVDなどの各種の視聴覚教材を用いるだろう。これらは教員なら誰でも在職中は続ける努力である。

しかし教材としての有用性を持ち、なおかつかなり刺激の強い視聴覚教材であっても、現在の教室では生徒がそれに集中しないことがままある。その理由は生徒が日常的に接しているテレビやコンピューターからの情報があまりに刺激が強くなり、その結果教室で教員が発信できる情報のインパクトが相対的に低下しているからではないだろうか。口頭でのレクチャーと板書だけからの発信では言うまでもないが、高度な映像機器を使ったところで状況はさほど変わらないものと思われる。

そのなかで生徒の私語も発生しやすくなる。生徒の私語は、社会全体におけるメディアの発達なかで、教室がどのように他の場より生徒に

とって有意義な情報を提供できるかを問うものではないだろうか。

滝川一廣は不登校について、原因は進学競争や「過剰」な校則といった学校問題や、過保護・家庭養育機能の低下といった家庭問題であるとする見方を退けた。そして高校への進学があたりまえになった昭和 50 年代から不登校が急増することに着目し、その原因は、高度経済成長により近代化が達成されるなかで、学校自体は劣化したわけではなく以前とさほど変わらないのに、行くのが当たり前の場となったので、かつてのように貧しい現状から輝かしい新知識と豊かな未来への通路とは見なされなくなり、生徒にとって行くことが主体的行為・能動的選択ではなくなったことであると考えた。また社会全体の文化水準の向上・情報化の進展により、学校で教えられる程度の知識はいくらでも周囲にあふれるものとなり、学校はいわば「聖性」を失ったと指摘した。こうして生徒や社会全体からの支持が低下した学校は、不登校や秩序の維持に苦闘するようになったとする<sup>3</sup>。

筆者は授業中の私語の増加も、この流れの中にあると考える。そしてこのような課題に直面する現在の教室で、地域教材は従来の意義付けとはカテゴリーの異なる独自の意義を持つのではないかと考える。

### 3. 日本史 A の授業実践

#### 3.1 授業の対象・目的

ICU 高校においては日本史 A は第 2 学年に設置され、2 単位で地理 A との選択必修となっている。1 クラス 20 名程度であり半数ほどが帰国生である。この授業で日本史に初めて触れる生徒や、日本語の学力が高くない生徒も在籍するので、そのような生徒でも理解可能な平易な言葉でレクチャーをおこなうことを心掛けている。生徒は大学に進学するものがほとんどである。日本史を受験科目としない生徒が多いため特に受験対策はおこなっていないが、受験科目とする生徒もおり、教科書に記述されている基本的な

事柄は扱わなければならない。この授業は1時限(50分)でおこなう。

本時の目的を述べれば、教科書の「第2次世界大戦と日本」の中の「国家総動員法と戦争経済」・「ファシズム体制の確立」より次の内容を生徒に伝えることである。「日中戦争が拡大すると、軍需品の発注を受けた三菱・三井などの既成財閥や、日産・日産などの新興財閥は急成長をとげた。1938年4月、近衛文麿内閣は衆議院内の反対論をおさえ、国家総動員法を成立させ、議会の承認なしに物資・エネルギー資源・輸送力・労働力などを軍需のために優先的・独占的に運用できるようにした。国家総動員法にもとづいて、1939年国民徴用令を公布し、民需産業から軍需産業へ労働者を動員し、ついで中学生以上の生徒、未婚女性などを強制的に軍需産業へ動員(勤労動員)した。」<sup>4</sup>

本時に入る前にすでに満州事変や日中戦争については授業をおこなっている。

### 3.2 実際の授業

T(以下、Tは教員から生徒への説明・指示・発問である)「この2枚の写真は何を示していると思いますか?」

こう問いかけて2枚の写真が掲載されている市販の写真パネル<sup>5</sup>を示し、生徒に推測させる。1枚の写真はこれから静岡の連隊本部を出て行こうとする兵士の隊列を写したものである。被っている毛皮の帽子から、彼らは寒冷地に向かうことがわかり、これは満州事変で出撃する兵士たちの写真であることが推測できる。

もう1枚の写真は連隊本部から出てくる中年以上の男女の行列を写したものである。彼らが胸に抱えている白い箱が遺骨の箱であることに生徒が気づけば、日中戦争に入って戦死者が増えたこととこの写真を生徒は結びつけることになる。

教員は日中戦争の泥沼化により、物資も窮乏してきたことを当時の標語などを使い説明する。そして国家総動員法について、その内容や成立過程を「黙れ事件」などを交えて説明する。

T「君たちが学んでいるこのICU高校とお隣の大学・ICUのキャンパスは、元々このころから建設が進められた軍用機を開発するための施設・中島飛行機三鷹研究所でした。国家総動員法とも関係します。さて君たちはICUキャンパスを広いと思っているのでしょうか、現在このキャンパスはどのくらいの広さなのでしょう? また現在のキャンパスは元の中島飛行機三鷹研究所の一部にすぎないのですが、三鷹研究所の広さはどれくらいだったと思いますか?」

答えは現在のキャンパスの広さが約19万坪、中島飛行機三鷹研究所の広さが約60万坪である。中島飛行機三鷹研究所の敷地跡がICUキャンパス以外にどのように利用されているか説明していくと、その広さに生徒は一様に驚く。

そして中島飛行機三鷹研究所がどのような軍用機開発をおこなったのかを説明する。T「ここでそのエンジンの開発がおこなわれていたアメリカ大陸を爆撃するための巨大爆撃機『富嶽』(計画段階で開発中止)は、日本からアメリカ大陸に向かって吹く偏西風に乗って効率良くアメリカ大陸まで飛行するはずでしたが、帰りは逆風となります。中島飛行機の技術者はこの難問をどう解決しようとしたのでしょうか?」(答えはアメリカ大陸を横断し、さらに大西洋を横断し、ナチスドイツが支配するフランスに着陸するはずだった)、「爆弾を腹にはめ込み、飛び立つと脚を捨ててしまう、材料に木や布も使った単発の小型機『剣』は何に使用される予定だったと思いますか?」(答えは特攻。開発に従事したある理系の学徒は、文系の友人たちがこの飛行機で出撃していく可能性を考え、涙したという。ただし実戦に使用される前に終戦。)などの問答により、この地がいかにか戦争に組み込まれていたかを生徒に認識させる。

次に当時の痕跡を説明する。

現在富士重工業東京事業所となっている地域が「富嶽」のエンジン開発も手がけた中島飛行機のエンジン開発部門が置かれていた場所であり、中島飛行機が分割されてできた企業である富士重工業の研究所として、現在もエンジン開発が

行われていること、ICUの大学本館は中島飛行機三鷹研究所の陸軍用の機体の設計所で、ここで「剣」も設計されたことを説明する。そして学内で「滑走路」と呼ばれている道（現「マクリーン通り」）は、実は滑走路ではなく、広大な三鷹研究所の中央を走る道であり、その南側にエンジン開発部門があり、北側には海軍の機体開発部門が設置される予定であったと言われ（実際には実現しなかった）、突き当たりのロータリー（現在美しく整えられてチャペル前のロータリーとなっている）より西側には陸軍の機体開発部門が設置されていたことを説明する。

現在理学館の西側の林となっている場所に巨大な機体の組み立て工場があり、チャペル前ロータリーから南側に伸びる道は、今は急に細くなって大学グラウンド脇の小道となっているが、当時は太いまま続き、調布飛行場に中島飛行機三鷹研究所で開発された軍用機を移動させるための誘導路であったことを説明する。高校グラウンドの上空をよく低空で南に向かって飛行する小型機は調布飛行場に着陸するのである。今は民間機が使用しているが、当時この飛行場は皇居を防衛するための陸軍戦闘機の基地であった。この地に中島飛行機三鷹研究所が建設された理由は、この飛行場が存在したからだ。

これらの地域はロードレースの練習コースともなっているので、黒板に略図を描いて説明すれば、生徒はよく理解できる。生徒にとっては普段なにげなくながめていた景観が、新しい歴史的な知識によって、まったく違って見えてくる瞬間である。

T「中島飛行機三鷹研究所がどんな施設だったのかはだいたい理解できたのではと思います。ではこの研究所ができる前にはこの土地には何があったと思いますか？」

S「森か畑だったのではないかと思います。」

T「そうです。農家の集落もありました。君たちはマクリーン通りのバス停付近から北西に伸び、大学と高校をつなぐ広い道を越えて湯浅記念館の南側に続く、現在はレンガで舗装されている小道を知っていますね。あの道は実は中島

飛行機三鷹研究所が建設される以前からあった道で、このあたりにあった『三軒家』と呼ばれた農家の集落を通っていた道なのです。道の両側にはケヤキが並んでいます。かつてここに住んでいた住民が植えたものなのですが、ではあのケヤキは元々何のために植えられたのでしょうか？」

この問いに対しては生徒はなかなか答えられないが、関東地方は風が強く、当時の木造の家は壊れやすいので何が必要だったか？などとヒントを与えれば、「屋敷林」という答えが引き出せる。そして今度そこを通ったら小道と直角にも木が並べて植えられていることに気づいてほしい、それが屋敷と屋敷を隔てる木々だったと説明する。

T「ではこのあたりに住んでいた農家の人たちは中島飛行機三鷹研究所が建設された時、どうしたのでしょうか？」

「立ち退かされた」という答えは比較的スムーズに生徒から出てくる。さらに教員は「農家の人たちはどんな気持ちだったと思う？」と問いかけた上で、三鷹市が発行した戦争体験の聞き書き集のなかにある、この土地から立ち退かされた方々の言葉を読む<sup>6</sup>。そこには無理やり立ち退かされたことに対する恨みが表現されている。そして中島飛行機は住民の立ち退きにあたり、代替地で補えなかった分については相応の補償金を支払ったが、その資金は国家総動員法により軍需目的ということで銀行から無制限に借りることのできた資金によること、さらに大金と見えたそのお金も戦争経済の結果である敗戦後の急激なインフレ等でほとんど無価値となっていったことを説明する。

次にICUキャンパス内にある泰山荘は、もともと当時の新興財閥であった日本産業（そこから現在の日産や日立が分岐したことも生徒に答えさせる）の重役が建設したものであり、その後中島飛行機が買収した後は中島飛行機の創設者・中島知久平が住んでいたこと、中島飛行機も新興財閥であり、兵器の生産を担ったこのような会社が当時急成長していたことを説明する。

最後に1944年春からこの地にも勤労働員学徒が派遣され、現在都立西高校となっている旧制中学の2年生は「毎朝武蔵境駅に集り、4列縦隊で軍歌を歌いながら天文台通りを中島飛行機三鷹研究所の正門（現在の大学正門）まで歩いて通勤した。守衛さんに頭右と敬礼した後、各部署に散り、夕方になると今の大学本館前に集合してまた行進して帰っていった。戦争に負けるなどは夢にも思わなかった」、現在都立富士高校となっている女学校の4年生は「帰り道で農家にもらった数粒のイチゴが食糧不足のため、宝石のように思え、大切に家に持って帰り灯火管制で暗い明かりの下、家族と笑顔で食べた」など、筆者の聞き取り調査や回想記から当時の学徒動員の状況を話す。

### 3.3 生徒の感想

2007年度にこの授業を受けた生徒の感想を紹介する。

「普段、部活で走っている道に、戦争が関わっていたなんて驚いた。そーいえば、あの道急に細くなっているし、テニスコートの隣は確かに飛行機が入れるぐらい広い。走りながらいつもなんでICUキャンパスはこんなに広いの・・・と思っていたが、ちゃんとそれには理由があったのかと初めて知った。三軒家の道を通ったら、なんとなくその時の情景が浮かびあがってきそう。今日から、ICUキャンパスの見方が変わった。」

「私の祖父が確か特攻隊だったと聞いた気がします。当時まだ若かったらしいです。実際その飛行機が使われる前に終わってよかったです・・・ここは当時何々があって、とか、ここを歩いて何々していた等と言われると現実味があって鳥肌が立ちました。設計本館がそのまま使われているとか・・・」

「今まで意識もせずに歩いていた道が違った視点で見れるようになった。バス停からの道も元々は住宅地だったと思うと何だか切ない。祖母の話聞いた時も感じたが、国家が一体となって戦わなければならない戦争では国民1人1人の意思など尊重されないのだなあ。」

「国家総動員法とか、学生が労働者として働いていたというのは、おかしい。今の感覚だとありえないことだけど、その中にいるときは悲しいほど、周りが見えなくなる。戦争で使われた土地が今は学校になっている。希望と皮肉が入っている気がします。」

「私が毎日通る道で60年以上前の人たちは、戦争とともに生きていた、と考えると、戦争が身近なもののように思え、歴史はつながっているということを実感しました。」

## 4. 地理 A での授業プラン

### 4.1 授業の対象・目的

筆者は地理の授業は担当していないので、ここではプランのみを示す。

ICU高校においては地理Aは第2学年に設置され、2単位で日本史Aとの選択必修となっている。1クラス20名程度であり約8割が帰国生である。

高等学校学習指導要領における地理Aの「内容(1)現代世界の特色と地理的技能」は、「現代世界の地域性や動向を作業的、体験的な学習を通してとらえさせるとともに、地理的技能を身に付けさせる」ことを目指す。そのなかの小項目「エ 身近な地域の国際化の進展」は次のようものである。「生活圏、行動圏に見られる世界と結び付く諸事象の地域調査やその結果の地図化などを通して、身近な地域の国際化の進展や日本と世界との結び付きの様子をとらえさせる。」これを目標とした授業プランを作成した。「体験的な学習」とするためにグループ別のフィールド調査を取り入れるが、それは授業時間内ではおこなわず、放課後に生徒がおこなうものとする。近隣地域の調査なので生徒の負担が過重になることはないだろう。授業時間は計3時限を予定する。

### 4.2 授業プラン

1時限について。

教員は最初に中島飛行機三鷹研究所について

説明する。日本史 A の授業実践でおこなったような総動員体制についての説明は省き、アメリカと戦うための軍用機開発の施設であったことを中心とし、外国との繋がりに重点を置くために、アメリカ軍の空襲により工員が4名死亡していること、地下では長大な地下壕を掘るため朝鮮人労働者が汗まみれで働いていたことを加える。

次に現在の国土地理院発行の1万分の1の地図と、同じ縮尺の中島飛行機三鷹研究所の敷地の範囲を OHP 用の透明なシートに印刷したものを用意する。生徒にその2つを重ねさせ、現在中島飛行機三鷹研究所跡にある諸施設を列挙させる。ICU, ICU 高校, 小金井市立東中学校, 中近東文化センター, 東京神学大学, ルーテル学院大学, 富士重工業東京事業所, 都立野川公園, アメリカンスクールインジャパン, 都立武蔵野公園, 運転免許試験場が挙がることとなる。

そしてそれぞれの施設と世界との関係を生徒に予測させる。ルーテルはルターだからドイツと関係ありそうだ、といった程度でかまわない。そのうえで「どうしてこれほど世界各地と交流がありそうな施設が中島飛行機三鷹研究所の跡地にあるのだろうか?他にこんな地域はあるのだろうか?」と問いかける。

そのあと生徒を約10の班に分け、それぞれの施設の沿革、どうして現在地に現存するのか、現在どのように世界と結び付いているのか(学校・研究施設なら留学生・研究者などの交流、研究対象とする地域や国々)を調査させる。HP・文献で事前調査した上で、現地を訪れデジタルカメラで写真を撮影し、できれば世界との結び付きをその施設のスタッフにインタビューさせる。ICU 高校を調査する班は課題が容易なので、中島飛行機三鷹研究所の概略についてさらに調べ、現在も残るその痕跡の写真を撮影する。

2・3 時限について。

ICU 高校・中島飛行機三鷹研究所を担当する班を皮切りとし、各班にパワーポイントなどを使用させて調査結果を発表させる。

各施設の沿革の発表を比較していけば、近代

日本の国際化の進展が浮かび上がるはずである。ルーテル学院大学の沿革は1909年に遡る。1978年に開設されたICU高校は、生徒にとっては初めての知識となる可能性が高いが、日本企業の海外進出に伴う「帰国生問題」の対策として設立されたものである。

各施設の世界との結び付きについての発表は、あらためてその多様性を生徒に再認識させることになるだろう。そして事前の予測を振り返れば、実証的な調査の効果を生徒に認識させることができる。

さらにどうしてこの地域にこれほど世界各地と交流がありそうな施設が集中したのか、という問題について話し合わせる。おそらく中島飛行機三鷹研究所の跡地の大部分を戦後買収し、その後その一部を他施設に転売していったICUの事情と意向が注目されるだろう。

最後に中島飛行機三鷹研究所と現在の諸施設との世界との関係をあらためて対比すれば、あざやかに日本と世界との結び付きの時代による変化が浮かび上がることとなる。

## 5. 地域教材の意義

### 5.1 通常の授業で教える知識の重要性を実感させる

日本史 A での授業実践を受ける前の、生徒のこの地域に対するイメージはどのようなものだろうか。「キャンパスが広い」「なんて長い桜並木なんだろう」「壁の向こうに工場らしきものが見える」「森のなかを通るきれいな小道がある」「小型の飛行機が上空をよく低空飛行する」などの、バラバラでぼんやりとした印象は持っていただろう。ところが「戦争のため総動員体制下で建設された中島飛行機三鷹研究所」という、教科書の重要事項とも関わる歴史の知識を得ることにより、これらはすべて意味を持って繋がってくる。キャンパスを見る目が大きく変わるのである。この時生徒は、「わかった!」という感触を得ることができるのではないだろうか。

このことは、生徒に「国家総動員法」「新興財閥」

「勤労働員」といった教科書で扱う通史的な歴史の知識の重要性を教えることになるだろう。キャンパスを見る目が変わることを通して、こうした知識の有用性を生徒は実感できるからだ。

もちろんこの授業実践で中島飛行機三鷹研究所という地域教材を使い生徒に教えた教科書的な内容は、数語にすぎない。教科書のなかにおいてはピンポイントである。しかしそれでもその言葉のこの地域に及ぼした影響の大きさを実感することにより、日中戦争・太平洋戦争とそれに関わる諸事項の広がりや深さは以前よりはるかに認識しやすくなるのではないだろうか。またこの後の通常の授業でこれらの戦争についての学びが深まれば、地域に対する見方もより深まることになる。これは高校現代社会の、一本のバナナから南北問題の重さを自分にも関わる問題として生徒に伝えるよく知られた授業実践<sup>8</sup>の効果と似ているかもしれない。

この意義を生かす授業方法上の留意点としては、なるべく地域の中ですでに生徒が見聞している事柄のみを用いることである。そして生徒がその事柄やすでに持っている知識を、授業で与えられた情報と組み合わせて新たに意味づけすれば答えられるような発問を工夫することが大切である。

教員の視点からすれば地域の重要な事柄であっても、生徒がまったく見聞していないものは教材としない方がよい。もしそうすると事柄自体を新たに教え込まざるをえなくなる。教員がわかりやすくその事柄の意味を説明するのに失敗すれば、「どうしてこんな小さなことを勉強しなければならないのか」という不満が生徒から出るし、新しい歴史の知識による異化効果も低下する。

また、教科書の重要事項と関連することに地域教材の内容は絞りこんだ方がよい。地域教材と通常の授業とが互いに意味を深めあうことを目指すのである。もちろん生徒有志を対象とする特別授業をおこなうのなら話は別である。また、もし教科書の記述と矛盾する事実があるなら、それは極めて重要な教材となるだろう。

## 5.2 検証可能なリアリティー

ここで示した日本史 A の授業実践に生徒が集中するのは地域教材の持つリアリティーによるのだと思う。それは生徒が常日頃体感している景観が、授業で提示される過去の事実を裏付ける根拠の1つとなっていることによる。

そして地域教材なら、生徒自身にさらにいくつも存在する根拠を確かめさせることができる。例えば生徒に「レンガで舗装された小道の並木が屋敷林だった証拠に、小道に直角の方向にも木の列があるから見てごらん。」「当時中島飛行機三鷹研究所に建設資材を運んだ新小金井駅からの引込み線の跡が湾曲した道になっているし、今も多摩川線の線路にその引込み線用に分岐していたところが残っているから駅の近くを注意して歩いてごらん。」と促し、授業で獲得させた新たな地域を見る目で、今まで視野に入っても認識できなかった事実を生徒に認識させ、さらに過去の出来事のリアリティーを高めることができる。

このようなリアリティーと、DVDなどの視聴覚教材を用いるそれとを較べてみたい。テレビの歴史番組などで過去を忠実に再現したとされるコンピューターグラフィックなどが登場する。手っ取り早く生徒に過去に対する親しみを持たせる意味で教員にとっては便利であるが、どこまで実証できる内容でどこからが想像によるのかは教員にもまずわからない。生徒に視聴させればそれをほぼ完全な史実だと思い込むだろう。与えられる情報を暗記することが重視される教育を受けてきた生徒はなおさらである。

紛れ込むフィクションを事実と信じてしまうことの危険性はいうまでもないが、過去が映像化されたほどに完全にわかってしまっていると生徒に誤認させることは、授業で提示される情報に対し完全な受身に生徒を追い込み、生徒の好奇心を削ぐことになりかねない。

その点地域教材の場合、生徒に獲得した知識の応用を促すことが容易であるので、より深い認識への能動性を生徒に持たせることができる。

このような地域教材が持つリアリティーの特



徹を生かすために、授業ではコンピューターグラフィックのような想像図があったとしてもそれは用いず、生徒がすでに持っている見聞や、教員が入手した確実な資料・当事者の証言などを主に用いることが望ましい。一次資料や証言のみを用いて生徒自身が想像図を描くことは地域教材の優れた授業方法であろうが、完成した想像図を見せてしまうことはかえって地域教材の特質を弱めることになると思う。

### 5.3 実証的な調査の方法を教える

地域教材が教員・生徒双方にとって検証可能なものであるならば、それを対象に生徒に実証的な調査を本格的におこなわせ、調査方法そのものを身につけさせることも可能なはずである。これは情報化に対応できる生徒を育てる上で、不可欠な教育内容だろう。

過去の歴史教育においては高知の高校生によるビキニ被災船の調査、岡山の高校生による亀山島地下工場における朝鮮人労働者の実態調査、長野の高校生による松代大本営の調査、長野・東京の高校生による陸軍登戸研究所など、優れた高校生自身による調査の発表がなされてきた<sup>9</sup>。

ただしこうした調査は有志の生徒による課外活動は別として、限られた授業時間中に行うことは極めて難しい。また特に現在においては生徒にとっても調査の意義を理解しやすい「戦争遺跡」の調査は、中島飛行機三鷹研究所を含め一次資料が極めて限定されていること、証言可能な当事者がすでに少なくなってしまうことから実証研究そのものが難しくなっている。

生徒自身がテーマを選びレポートを作成することには可能性があり、筆者が課している「15年戦争についてのレポート」のなかで市町村史・社史・聞き取り調査を活用した自分と関係する地域の歴史の優れたレポートを提出する生徒もいる。しかし今のところテーマをそれに絞り全員にレポートを作成させることは、生徒の環境が様々なので難しい。

その点地理教育においては対象が現在が中心なので、身近な地域における実証研究は容易で

ある。その1例を本稿の地理Aの授業プランで示した。遠隔地の調査のようにインターネットや文献のみによるのではなく、実際に足を運んで現場でしか得られない情報を得ることのできるメリットは大きい。

生徒に対しては、なるべく調査の問題意識を明確にして動機付けを強めること、発表が実証的なものとなるよう調査・発表の過程で個別に指導することが必要であろう。予測の間違いを是正し、どんなに小さくても新しい発見があり、個別の事実を総合して地域形成において何が大きな作用を及ぼしているか分析できれば、実証的な調査の方法と意義に生徒は触れたことになるだろう。

### 5.4 学校の情報源としての価値を高める

2で述べたように、情報化の進展により、学校がいったい何を独自のものとして生徒に伝えられるかという問題が深刻化する。グループに分かれての実証的な調査など、同年代の生徒が集まる学校の中でしか出来ないことを行わせることはその一つの答であるが、やはり主流であるレクチャー形式の授業において教員が生徒にとっても意味のある独自の情報を発信できれば、それは教員にとってまさに有難いことである。

地域教材となるデータの蓄積は各自治体の教育委員会によってもおこなわれているが、不十分であったり、分析がなされていなかったり、まだ未解明な謎も多い。その部分にその地域の学校に勤務する教員が参入することにより、情報化のなかでも教員が比較的容易に独自の情報を発信することは可能である。地域住民の歴史講座に協力することもできる。

ただし独自に蓄積した情報を教室で発信する場合、その中でどんな情報が生徒にとって有意義かを、5.1で示した方向でよくよく吟味することが大切である。これを誤ると教員の思い入れが強いだけにかえって生徒の共感は得られず、授業を成り立たせるのに逆効果となるだろう。

## 6. おわりに

地域性に乏しい高校での地理歴史教育における地域教材の意義を、中島飛行機三鷹研究所という地域教材を使った授業を通して考えてみた。地域教材の特質を生かせばピンポイントではあるが、社会全般における情報の高度化に対応し、実証的な学問の姿勢を伝える授業を創造できる可能性がある。どのような社会を支えるどのような主体を形成すべきかという大きな問い（筆者の念頭には平和をつくりだす主体という命題が常にあるが）の前提として、まず高校の授業の中で地理・歴史を学ぶ意義を、地域教材を用いることによって生徒に実感させる試みを続けたい。

## 注

- 1 高柳昌久(2006). 中島飛行機三鷹研究所における動員学徒 アジア文化研究, 32, pp.177-201.  
牛田守彦・高柳昌久(2006). 戦争の記憶を武蔵野にたずねて 増補版 ぶんしん出版 pp.112-128, 161-178.
- 2 関原正裕(1997). 地域の掘りおこし運動と地域に根ざす歴史教育 歴史教育者協議会(編) 歴史教育五〇年のあゆみと課題 未来社 pp.150-164.
- 3 滝川一廣(1994). 家庭のなかの子ども学校のなかの子ども 岩波書店 pp.127-216.
- 4 宮原武夫ほか(2004). 文部科学省検定済教科書 高校日本史B 実教出版 pp.192-193.
- 5 鳥海靖監修(1989). 日本史写真集第Ⅲ期近現代編 山川出版社 No39
- 6 三鷹戦時下の記録編集委員会(1986). いま語り伝えたいこと 三鷹市 pp.243-245.
- 7 文部科学省(1999). 高等学校学習指導要領解説 地理歴史編 実教出版 pp.305-306.
- 8 大津和子(1987). 社会科＝一本のバナナから 国土社
- 9 澤野重男(1994). 高校生と地域掘りおこし 歴史教育者協議会(編) あたらしい歴史教育 第4巻 地域史に学ぶ 大月書店 pp.83-107.